

ジュニア部門 〈母への思いに関する作文〉

小学生部門 優秀賞

# のりちゃんへの思い

白山市立石川小学校

番<sup>ばん</sup> 下<sup>した</sup> 輝<sup>てる</sup> 也<sup>や</sup> さん

## 〔応募動機及びコメント〕

先生から「母への思い」優秀賞を取ったと聞いた時は、すごくうれしかったです。なぜならぼくはコンクールなどで一度も賞を取ったことがないからです。優秀賞を取ったということをお家の人に言う「すごい」などとすごくほめられました。でもお家の人はもちろんですが自分のことを一番喜んでるのは、のりちゃん(母)だと思います。

のりちゃんは、ぼくが四才の時に病気でなくなってしまった。ちなみにのりちゃんというのは、ぼくのお母さんのことだ。のりちゃんは、とてもきれいな人だ。けれど髪が長くてちよつとこわい。

ぼくが生まれた時の体重は、二、一三六gだった。小さいからといって「いやだ」など文句は言わず大事にぼくを育ててくれた。

ぼくは、のりちゃんといっしょにいた時の事は、あまり覚えていない。特に覚えていている事は、毎日お父さんとケンカしていた事とぼくがよく食べていた物の事だ。ぼくがよく食べていた物は、冷凍食品のアンパンマンのポテトだ。のりちゃんの手料理の味は覚えていない。それどころか食べたという記憶すら覚えていない。だからときどきのりちゃんの手料理が食べたくなる。何でのりちゃんの手料理の記憶が残っていないんだと自分を責めたくなる。お父さんのことは、「とおちゃん」と呼んでいる。ケンカの事は、思い出ただけでいやだ。いつも、とおちゃんとのりちゃんはケンカしていた。ある日おばあちゃんから電話がかかってきた。「今日食べに行くけどおすしか、焼き肉どっちがいい」という話だった。ぼくとお兄ちゃんはおすしがいいと言った。のりちゃんは、ぼくたちに合わせておすしと言った。けれどとおちゃんは、焼き肉がいいと言った。そのことでのりちゃんとおちゃんは、ケンカしてしまった。そうしてとおちゃんは、怒って家出してしまった。またこのパターンだ。いつも怒って家出したが、一日したら帰ってきた。こうして毎日のようにケンカしていた。ぼくには、聖也という兄がいる。聖也とは、ケンカもするし性格は正反対だ。ぼくより二年間多くのりちゃんといられたと思うと聖也がうらやましくなる。実は、ぼくと聖也とのりちゃんとおちゃん、源兵衛かどこかにひっこす予定だった。だけどのりちゃんが死んでしまつて四人ではなく、今は、ぼくと聖也とおちゃんとおばあちゃんとおじいちゃんと六人で暮らしている。

ある日、ぼくが二年生のころに勉強しているとのりちゃんが台所に

立っていた。ぼくはすぐさま「のりちゃん」と言ってかけよつたが、もうすでにいなくなつていた。きつとぼくがいい子にしているか見に来たのだろう。それ以来もうのりちゃんは見なくなつた。もう一度会いたいといつも思っている。

のりちゃんが死んでしまったのは、すごくショックだった。けどのりちゃんがなくなつたことで「死ぬ」ということのつらさ、だれかのため

に生きるという大切さがよくわかつた。のりちゃん本当にありがとう。ぼくは、のりちゃんがいたからこそ生きてこれたし、今とっても楽しいよ。これからもずっと見守り続けてね。絶対にのりちゃんの分も長生きするからね。